理が明確に働いた「儀式としての革命」として、ビザンツ人の憲法感覚に定着していたからと考える。

第六章『社会的流動性』では、ビザンツの社会構造を、ヨコ同志のつながりはほとんど見られず、上層部の個々のメンバーがそれぞれ中・下層民とつながりを持つタテ社会と規定する。この仕組の中で、社会的上昇が皇帝位に至るまで開かれることになり、ビザンツの社会的流動性は著しく大きいと考えられるのである。

エピローグ『市民の向背』では、首都市民の反対でクーデターの失敗した例を挙げ、再度、市民の役割を強調したところで、本書を締めくくっている。

以上のように、本書は、ビザンツ人の意識（氏はこれを憲法感覚と言う）を、元首政の伝統の存続の中に見出そうとする方向で書かれている。使用された史料が、皇位継承に関するものに片寄っているのも、こうした問題関心からと思われる。その内容は、コンスタンティノープルの住民に限られるとはいえ、ビザンツ人のメンタリティーの重要な一面を表していることに疑いはない。

しかし、読者は、こうしたアプローチとは別に、ローマの影をぬぐい去ったところにビザンツの心性を見つけようとする研究が進められていることも忘れてはならない。結局、ビザンツは、ローマの伝統を引きずりながら、ローマに含まれ得ない一つの文明を形成したのであり、この二重性にビザンツの特異性があるからである。

いずれにしても、本書は、千年にもわたるビザンツ帝国の皇帝と市民の関係を、わかりやすく、鮮やかに描き出した好著である。

（新書版　二二七頁　一九八五年六月
岩波書店　四三〇円）
（中嶋薫　京都大学大学院生）

飯島武次著
『夏殷文化の考古学研究』

中国考古学において近年にわかに注目をあつめているのが、中国文明の起源、とりわけ夏王朝の実在をめぐっての問題であろう。前世紀末の甲骨文の発見と一九二八年にはじまる安陽殷墟の発掘調査によって、零細な文献記録しかない殷王朝の存在が実証された。そして各地で考古学的調査が飛躍的に拡大しつつある今日、殷王朝にさかのぼる伝説上の夏王朝の存在を考古学的に実証しようとする精力的な研究が、中国の研究者によってすすめられている。ところが我国においては、この問題に対する活発な論議がおこなわれているとは言いがたい。中国考古学を専攻する研究者が少ないことに加えて、我々外国人が入手できる資料に限りがあり、実際に発掘に従事している中国の研究者に比べて制約が大きいからである。こうした状況の下で、中国から発表されるデータを再整理して、夏の問題、ひいては国家の起源の問題に真正面から取組もうとしたのが本書であり、その野心的な姿勢にまずは敬意を表したい。

本書は筆者が一九七七年より一九八三年までの間に雑誌『古代文化』に「殷前期の提言」と題して発表した十六篇を、その後の知見を加筆した上で収録したものである。黄河中流域における河南龍山文化、二里頭文化、二里岡文化という連続する文化の中で特に二里頭文化に焦点をあて、随所に自説を盛りこみながら、さまざまな角度からその文化の内容を詳しく解説している。全体は九章からなり、遺跡、遺構、遺物の順

に整然と論をすすめる形をとっている。

第一章「二里頭文化の分布と夏殷の遺跡」では、河南省西北部と山西省西南部に二里頭文化が分布し、その地域に「夏」に関する伝承が多いことを指摘する。第二章「遺跡と文化層」では、河南省の二里頭遺跡、煤山遺跡、王城崗遺跡、山西省の東下馮遺跡を例にその相対編年を示している。ほぼ中国の研究者に従って河南龍山文化、二里頭第一期、二里頭第二期、二里頭第三期、二里頭第四期、二里岡下層、二里岡上層という基本的な順序を組立て、この編年をもとに続いて遺構、遺物の具体的な解説がおこなわれる。

第三章「宮殿址」では、二里頭遺跡において大規模な基壇や回廊、大門を備えた宮殿が二里頭第三期に出現したことを明らかにし、第四章「小型建築址」においては、二里頭期に建築物の種類が増加したことを確認する。そして第五章「墓葬」では、二里頭期の墓葬は龍山文化を継承したもので、大型殉葬墓や木槨の出現、一定の組合せをもつ多数の青銅器の副葬は、のちの二里岡期まで下ることが明らかにされる。

第六章「陶器」では、二里頭第二・三期に陶製礼器があらわれ、印紋や二里岡期の青銅器にみるような紋様が出現すること、第七章「青銅器」では、二里頭第三期に青銅容器、武器、工具などが出現することが示される。そして第八章「玉器」において、二里頭期の玉器には先行する新石器文化、特に長江下流域の良渚文化の強い影響が認められ、同時に礼器としての数量と内容が豊富になることが指摘される。

考古資料にあらわれた以上の現象から、筆者は二里頭第二期と第三期との間に大きな変化を見出し、二里頭第三期以降を殷文化に比定する。すなわち、二里頭第三・四期の宮殿址、陶器、玉器などに示される文化内容は、後続する二里岡期、殷墟期の殷文化と密接に連続して基本的に同一文化と認定しうるものであり、この比定は文献の記録やC14年代測定の結果とも矛盾しないとする。筆者はさらに二里頭第三・四期を権力機構が整い、宗教的権威が確立した古代国家の段階と規定し、これに先行する二里頭第一・二期は新石器時代後期の河南龍山文化を継承した部族国家的な社会形態の段階であり、問題の夏は、河南省西北部から山西省西南部に存在した部族的大地域集団であった、と結論づけている。

巻末には索引と中文概要が付されている。二里頭文化全体を網羅した本書の性格上、索引は利用者に大きな便宜を与え、また中文概要は類書に例のない面白い試みであり、中国の研究者との交流を深めていく上で裨益するところ大であろう。

本書の所論に対する賛否の意見はともかくとしても、不満が全くないわけではない。中国側から発表される資料の紹介に多くを割いたために筆者の自論がやや弱くなった感が否めず、少なくとも立論の基礎となる編年や時期区分に中国の報告に対する批判的な姿勢が望まれた。いっぽう「部族国家」や「古代国家」という用語は適切であろうか。また、二里頭第二期と第三期との間に大きな変化を認める本書の結論からみると、「二里頭文化」という用語は妥当であろうか。理論的な方向にもう一歩立ちいった議論を期待したい。

近年、中国への旅行や留学が自由になり、中国考古学を専攻する研究者が増加しつつある。本書を契機としてわが国でも夏に対する論議が高まるとともに、本書が外国考古学としての中国考古学研究の一指針とな

ることを確信する。

（A5版　四七九頁　図版一四頁　一九八五年二月　山川出版社　七〇〇〇円）

（岡村秀典　京都大学助手）

会　告

昭和六〇年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日（土）午後一時三〇分より楽友会館において開催されました。

公開講演は中村幹雄、水津一朗の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終りました。

一九一九年一月ナチ党の成立をめぐって
——比較ファシズム論の観点から——
中村幹雄氏

日本とヨーロッパの間
水津一朗氏

昭和六〇年度 史学研究大会講演要旨

一九一九年一月ナチ党の成立をめぐって
——比較ファシズム論の観点から——

中村幹雄

ファシズムとはそれ自体、比較概念なのであって、これは共通の性格をもつ複数のファシズムの存在を前提として成立する概念である。近年、欧米においてはファシズム概念を否認する学説が登場しているが、このような研究は、かえってナチズムやファシズモの個性的認識をさまたげる働きをするものであろう。ナチズムやファシズモを取り扱う場合には、それぞれに独自なものは何かという問いよりも、ファシズムにおいて独自なものは何かという設問の方を優先させねばならない。本発表の課題は、ナチ党に即してファシズム運動の成立を考察するところにある。

ナチ党、つまり「国民社会主義ドイツ労働者党」（その前身は「ドイツ労働者党」DAP）は、一九一九年一月五日ミュンヘンの労働者ドレクスラーによって創立され、この党には、当初、彼の同僚の労働者二四名が参加する。この「国民社会主義」という構想の出現を考察するにあたっては、第一次世界大戦が従来のような内局戦争Kabinettskrieg ではなく、民衆が全面的に参加を余儀なくされる歴史上、最初の総力戦という性格をおびていたことを決定的に重視しなければならない。何故なら総力戦は、㈠国民的一体感情を煽りたてて国内の政治的社会的亀裂を押し流しはするものの、他方ではそれの存在を逆に鋭く自覚させ、㈡民衆に莫大な犠牲・負担を強いることにより、民衆の側にそれへの代償、つまり政治的社会的平等要求を目ざめさせる働きをするからである。国民社会主義構想は、このような総力戦の平準化作用にそれなりに棹さして成立する。

ドレクスラーは、大戦中には激情的なナショナリズムにとらわれ、一九一七年九月に「祖国党」が結成されて城内平和と勝利の平和を訴えると、この組織に加入する。だが彼は、その三ケ月後に、この組織を「民